

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2017～2019
課題番号：17K02631
研究課題名(和文) コロムナ地区と1840年代のドストエフスキー

研究課題名(英文) Kolomna and Dostoevsky in 1840s.

研究代表者

近藤 昌夫 (KONDO, Masao)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：80195908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は先の研究課題「1860年代のドストエフスキーにおける文学と建築のトポロジー」(課題番号23520409)を継承するものである。引き続き全体構想(文学都市サンクト・ペテルブルクを触媒にしたロシア近代文学の生成過程の解明)を念頭に置き、本研究は特に1840年代のドストエフスキーの作品(『貧しき人々』、『家主の妻』、『がよわい心』、『白夜』)を取りあげ、40年代のドストエフスキー文学の固有の特徴である夢想家とコロムナ地区の関連を検討した。その結果、新たに『貧しき人々』の主人公が夢想家の原型であることが証明され、『白夜』の夢想家が他の夢想家とは一線を画していることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシア文学のコロムナはこれまでペテルブルクの貧民区として補足的に説明されるにとどまり、コロムナと文学作品の関連を論じた研究は無かった。「生理学もの」が流行した40年代には、ドストエフスキーの作品にもコロムナが繰り返し描かれるが、やはり小役人の住む貧民窟と説明されるばかりで、繰り返し描かれることの重要性は等閑視されてきた。本研究は、文学のコロムナに光を当てただけでなく、一様に理解されていた40年代のドストエフスキーの夢想家に、新たな視角を指摘したことでドストエフスキー研究にも寄与した。

研究成果の概要(英文)：Having analyzed the correlation between Kolomna in St.Petersburg and Dostoevsky's novels of 1840s, like "Poor Folk", "Another Man's Wife", "A Weak Heart" and "White Nights", it became clear that Dostoevsky created a new type of mechtatel' in "White Nights".

研究分野：ロシア古典文学

キーワード：コロムナ ドストエフスキー 夢想家 プーシキン ゴーゴリ ペテルブルク神話

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究に先行する研究課題「1860年代のドストエフスキーにおける文学と建築のトポロジ」(課題番号23520409)の研究成果『ペテルブルク・ロシア 文学都市の神話学』(未知谷、2014)を、所属機関の在外研究制度(2014年度)を活用して現地で検証した。その結果、新たにペテルブルク南西部のコロムナ地区の調査・研究の必要性を痛感し、本研究の申請に至った。

40年代のドストエフスキーの夢想家達の物語(『貧しき人々』『家主の妻』『かよわい心』『白夜』)にはコロムナ地区が繰り返し描かれている。ここで言うコロムナとは、グリボエードフ運河に架かる銀行橋周辺に始まり、運河がフォンタンカ川と合流する下流域一帯に至る文学のコロムナを指すが、この都心部と自然の境界域は同時に、篡奪者に抵抗する melochi(「貧しい小者達」)を描いた、プーシキン(「ペテルブルク物語」)やゴーゴリ(「ペテルブルク小説」)の幻想的物語の舞台にもなっている。

この連続性を考慮に入れて40年代のドストエフスキーの一連の夢想家達を解釈することで、かれらの相違が何に起因するのか解明できるのではないかと仮説を立てた。

仮説に従って、『肖像画』でコロムナの土地柄の特異性を強調しているゴーゴリ文学の「日常性の美学」に倣い、現代のコロムナの日常観察から土地柄を『散策探訪コロムナ ペテルブルク文学の源流』(未知谷、2015)にまとめた上で、今回の申請に至った。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、ドストエフスキーの40年代のコロムナ作品を取りあげ、「コロムナの産物」(『ペテルブルク年代記』1847)とされる夢想家を再検証することで全体構想(文学都市サンクトペテルブルクを触媒にしたロシア近代文学の生成過程の解明)をより具体化することにある。

3. 研究の方法

文学のコロムナは現在のコロムナの行政区とは必ずしも一致しない。従って本研究ではまず文学テキストのコロムナ地区を特定することから始め、次にコロムナがテキストに及ぼす「対位法的な効果」(前田愛「空間のテキスト テキストの空間」)の検証を行った。手順は以下の通りである。

(1) 文学的コロムナの特定

1840年代の文学テキストのほか、現地での聞き取り調査や二次資料に基づいて本研究が対象とする、文学のコロムナを特定した。

(2) コロムナとテキストの対位法的分析

処女作『貧しき人々』(1846)に前田愛の指摘する都市小説の「対位法的な効果」を確認するため、『貧しき人々』を田山花袋『蒲団』(1907)と比較した。理由は、田山花袋が前田の言う都市の散策者であり(『幻景の街』)、『蒲団』が瀬沼夏葉による『貧しき人々』の抄訳『貧しき少女』(1904)の出版直後に発表された作品だからである。

比較分析によって、いずれの作品においても主人公の「散策・空想・自意識」が物語に「対位法的な効果」をもたらしていることが確認され、同時に都市小説の主人公の特徴と都市空間との関係も明確になった。

続いて『貧しき人々』の主人公ジェーヴシキンを、ドストエフスキーがフェリエトン『ペテルブルク年代記』で言及しているコロムナの夢想家と対照した。その結果「貧民窟」に住み、「散策・空想・自意識」を特徴とする中性的な存在ジェーヴシキンが多くの特で『ペテルブルク年代記』の夢想家に該当することが確かめられた。

(3) 先行研究の検討

(1)と(2)で得られた、コロムナの夢想家の基準をもとに、コマローヴィチによるドストエフスキーのフェリエトン研究を検討した。コマローヴィチは、『貧しき人々』を『分身』とともに夢想家の物語と切り離している。だが、ジェーヴシキンにも夢想癖、叛徒精神、一方的善意等が認められることから、本研究はジェーヴシキンを夢想家の原型として『家主の妻』

(1847)『かよわい心』(1848)『白夜』(1848)の夢想家を、プーシキンおよびゴーゴリの、コロムナの弱者達と関連付けて検証した。

4. 研究成果

本研究で得られた成果は以下の通りである。

(1) 西東に分断された、病めるペテルブルクで産み落とされたコロムナの夢想家が、『白夜』において変化していることが明らかになった。40年代後半のドストエフスキーの夢想家たちは一様ではない。『家主の妻』のオールドウイノフや『かよわい心』のワーシャは、強者の論理とキリスト教的博愛主義の対立を前面に出して描かれるが、『白夜』の「僕」は「全ペテルブルクを愛する」、社会全体に心を開いた夢想家に変容している。

(2) 夢想家のキリスト教的博愛主義に指摘できる叛徒精神の原点が、プーシキン、ゴーゴリのコロムナ物語に遡ることが明らかになった。これによって1840年代のドストエフスキーがしばしばコロムナを舞台にしたのは、文学的継承性がその理由ではないかとの仮説が得られた。

(3) 現在の行政区とは異なる文学のコロムナが特定された。行政区のコロムナは、クリューコフ運河を東の境界線とするペテルブルク南西部に限定されるが、先の研究成果(課題番号23520409)に照らし、文学のコロムナが都市と自然が接する境界の象徴であり、資本主義の浸透と共に都心部寄りに拡張していったことが今回確かめられた。

(4) 『貧しき人々』のジェーヴシキンが夢想家の原型であることが明らかになった。従来『貧しき人々』は、『ペテルブルク年代記』から誕生した一連の夢想家の作品と切り離され、『分身』『プロハルチン氏』とともにゴーゴリのコミカルな垂流と理解されていた。

(5) 『未成年』(1875)のアルカージの「消えゆくペテルブルク」は、これまで『かよわい心』(1848)のアルカージが幻視する「消えゆくペテルブルク」と同一視されてきたが、『未成年』の幻視は、共同幻想的理想ではなく、すでに修辭化していることが明らかになった。

(6) 田山花袋の『蒲団』に瀬沼夏葉『貧しき少女』の未訳部分が少なからず影響を及ぼしていることを明らかになった。

コロムナはしばしばペテルブルクの文学の舞台になるが、貧民区として注釈で言及されるばかりであった。しかし上の(1)～(5)で示したように、ペテルブルクをめぐるスラヴ派と西欧派の議論の中で、ペテルブルクの病因(例えばゴーゴリの拝金主義)が発症する日常の象徴として文学的意義を獲得し、プーシキン、ゴーゴリそしてドストエフスキーに継承されていったのである。

今後、コロムナ文学の系譜として体系化することで、全体構想(ロシア近代文学の生成過程の解明)をより具体化する可能性を与えたことも本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 近藤昌夫	4. 巻 第10号(通算32号)
2. 論文標題 田山花袋『蒲団』とドストエフスキー『貧しき人々』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スラヴィアーナ	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 近藤昌夫	4. 巻 第22号
2. 論文標題 「ロシア建築美術週報」 人工都市の総目録	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西大学「図書館フォーラム」	6. 最初と最後の頁 7~11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 近藤昌夫	4. 巻 第9号通算31号
2. 論文標題 「赤い鳥」のチェーホフ受容について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本スラヴ人文学会「スラヴィアーナ」	6. 最初と最後の頁 55~71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 近藤昌夫	
2. 発表標題 《 》	
3. 学会等名 XVIII - - (招待講演) (国際学会)	
4. 発表年 2018年	

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----